名古屋女子大学　紀要　40（人・社）　71～81　1994

幼児の人種知覚に関する一考察
――カリキュラムの国際化へ向けての基礎的研究――

鈴木重夫・鈴木まさとし*

Racial Perception in Japanese Young Children:
A Study towards Internationalizing the Curriculum

Shigeo SUZUKI and Masatoshi SUZUKI

Abstract

While race concerns educators in many multi-racial societies such as the United States, Japan has not looked at race and cultural diversity as important aspects of the society. Thus, not many studies investigated racial perception of Japanese children. This study attempts to describe racial preference and identity among Japanese children replicating some elements of the Dolls Test by Clark and Clark (1947).

Two pairs of dolls that represent black/white young boys and teenage girls were used. The test preoedure required subjects, whose age ranges from three to five, to answer to five questions by choosing one doll over the other, or neither of them. Questions are; 1) Which doll do you like to play with? 2) Which doll is a beautiful doll? 3) Which doll is a bad doll? 4) Which doll is an American? 5) Which doll do you resemble? The result shows that Japanese children have a tendency for pro-white overall. Subjects tended to choose white dolls for the liked and the beautiful, and black dolls for the bad. More children pointed Black dolls as Americans. They tended either to identify with white dolls or to avoid clear definitions on which resembled them. Fewer children identified themselves with black dolls.

This study showed that Japanese children, whose ages are three to five, have already acquired stereotypical perception regarding racial stratificaion in the society. However, their perception of the racial feature of Americans contradicted the researchers'assumption that they would choose white dolls. Future studies should focus on the mechanisms of racial preference and identity in Japanese children as well as their developmental procedure of racial perception. More extended number and range of subjects may contribute to answer these quetions.

---

*ウィスコンシン州立大学マジソン校教育学部博士課程

はじめに

今、日本では教育の場においても「国際化」と言う言葉が頻繁に使われ、一部では実践されている。幼児教育の場においても漸くその兆しがみえてきている。ではその「国際化」ということをどう考え、幼児教育の場でどう機能させていくかをかんがえていくことにする。

元、駐日大使であった　ライシャワー（EDWIN O. REISCHAUER）博士が「日本の次の世代」に対して著した『真の国際化とは（The Meaning of Internationalization)』（1988）で次のように述べている。

まず、その序文で「日本が繁栄をつづけ、平和のうちに生きのびていく唯一の方法が国際化であることははっきりしている（Internationalization is obviously the only means Japan has to continue its prosperity and survive in peace.)」とし、第一章では「外見上の生活様式を変えることではなく、内面における新しい考え方を作りあげていくこと（When I speak of internationalization, I do not mean the changing external life styles but the development of internal new attitudes.)」としている。さらに第二章では「国際化とは、より平和で安定も繁栄もしている世界のために日本が貢献できるように、いくつかの日本的特色を強化することを意味する（it suggests the strengthening of certain Japanese characteristics so that they can serve as contributions by Japan to a more peaceful, stable and prosperous world.)」としている。これらの提言と意見を基盤において日本の現実と将来を考えていく必要がある。

事実、日本においては、国際連合の常任理事国への動き、企業の海外進出・流入、海外からの労働人口流入の増加、1980年代後半の急激な円高に伴う影響、等、今迄以上に国際的な舞台に立つことが多くなってきているとともにさまざまな変化を来すことが予想される。

こうした前提に基づいて1985年の臨時教育審議会の第一次答申では、教育の国際化への対応をこれからの改革の重要課題の一つとなすべきであると報告した。それを受けて教育現場では国際理解教育などが活発に論議されるようになった。同時に帰国子女などの問題を通して、日本の子どもたちや教育界が異なった背景を持つ者に対して極めて排他的な態度をとる傾向があるということが明かにされてきた。帰国子女問題を取り扱った本の中には、日本語がうまく使えない、集団行動になじまないなどの理由から帰国子女がいじめにあっているケースが紹介されている（東京学芸大学海外子女教育センター、1986、宮七、1990)。これらの例に見られるように、日本の教育現場では新入者が少しでも異質であると、その異質性を排除するように子どもも教師も傾いてしまうことがある。これはまた、同じ日本人であるならばこうあるべきである、という誤った期待がこのような行動を呼びおこす一因とも考えられる。日本人としての出生と、皆と同じ顔つきをしていることから、帰国子女はそれぞれ違った生活経験を持っているにも拘わらず、そこで培われた性格や態度が批判の対象となっているのである。

ではこれがほかの明かに人種の違う場合はどうであろう。帰国子女に対する時に見られるような排他的な態度は、他民族の人間に対しても見られるのであろうか。その中でも肌の色、目の色が違う者に対して日本の子どもたちはどのような感じを抱くのであろうか。こうした問題は小学校や中学校段階で取り扱われるべきと思われがちであるが、アバウド（Aboud, 1988）によれば、「多くの研究が子どもたちがかなり早い時期から自分と違う肌の色を意識しはじめるという結果を出している。」としている。従って教育の国際化を目指すにあたっては、早い時期からの子どもの状態を知ることは必要不可欠であると考える。そこで本研究では日本の幼児の人種知覚に焦点を絞り、一般の子どもたちが肌の色などの違いに対してどのような感覚を

持っているかを検討する。

人種知覚に関する先行研究

アメリカ合衆国では、早くから子どもの人種知覚の問題が取り上げられていた。その先駆けとなったのはクラークとクラーク（Clark & Clark, 1947）によって行われたドールズ・テストである。このドールズテストでは、子どもたちに白人と黒人の両方の人形を見せ、どちらの方を好むかを聞くものである。使用された人形は、片方が褐色の肌に黒い髪、もう片方が白い肌に黄色い髪（金髪）である。実験のために人形の衣装は白いおむつのみに限られた。その他、色を除いた人形の形状は顔や手足の位置まで同じように揃えられた。被験者の半分には白人－黒人－白人－黒人の順で、残りの半分には黒人－白人－黒人－白人の順で人形の提示がなされた。被験者は質問に対してどちらかの人形を選択し、実験者に渡すように指示された。その質問の内容は以下のとおりである。

1．あなたが遊びたいと思う人形を私にください。(Give me the doll that you like to play with.）－もしくは一番好きな人形（like best-）
2．よい人形を私にください。(Give me the doll that is a nice doll.)
3．悪そうに見える人形を私にください。(Give me the doll that looks bad.)
4．よい色をした人形を私にください。(Give me the doll that is a nice collor.)
5．白人の子に見える人形を私にください。(Give me the doll that looks like a white child.)
6．有色人種の子に見える人形を私にください。(Give me the doll that looks like a colored child.)
7．黒人の子に見える人形を私にください。(Give me the doll that looks like a Negro child.)
8．あなたのように見える人形を私にください。(Give me the doll that looks like you.)

(Clark & Clark, 1947, p. 551)

1から4までの質問は人種の好みを尋ねる質問である。5から7までは人種差異についての知識を測るものであり、8は自己認識についてのものである。クラークら（Clark & Clark, 1947）は自己認識についての質問を最後に置いた理由として、事前の研究において黒人の子どもたちが最初に黒人の人形を自分に似ていると認識した後に好みに関する質問をすると、好みが黒人の人形に偏る結果が出てしまうからだとしている。従って質問8が最後に置かれているのは子どもがあらかじめ質問意図に気づくことのないようにするためである。

この実験の結果、黒人の子どもたちの多くが白人の人形を好み、さらに黒人の人形に対しては否定的な態度をとることが明かにされた。この傾向は三歳から四歳になるにしたがって強くなり、四歳以降七歳まで減少することがいわれている。

これらの実験によって、黒人の子どもたちの間には肯定的な自己認識が欠けているという理論が示された。この理論については1940年代以後も繰り返し検証がなされ、現在に至まで議論されている。ファインとボウアーズ（Fine & Bowers, 1984）の研究では、黒人の子どもたちの白人寄りの好みは1960年代ごろ一旦減少し、1980年代に至って再びその傾向を強めているとしている。彼女らは1960年代の公民権運動の広まりが一時的に黒人の肯定的な自己認識を喚起することになったのではないかと推察している。また彼女等自身による実験の結果、白人寄りの好みを持つのは女児よりも男児にその傾向が強いとし、その理由として男児は将来、経済的に成功する必要があると感じているため、社会的地位の高い白人にその同一性を見いだすことを挙げている。

スペンサー（Spencer, 1984）はこうした研究の根底をなす白人寄りの好みイコール肯定的自己概念の欠如という図式に疑問をもち、黒人の子どもたちの人種に対する認識、態度と自己概念を同時に測定し、両者の間に相関関係は認められなかったとしている。黒人の子どもたちが白人寄りの態度を示すのは自己否定ではなく、社会的価値観が彼らにも浸透しているからであり、精神的病理をかかえながら常にいるわけではないというのが彼女の論点である。クロス（Cross, 1991）もまたその著書の中で同じ立場をとっている。彼は黒人の子どもたちはその生い立ちから二つの世界に生きる存在であり、二文化的であるが故にそのような結果を生ずるとしている。その例として、黒人の母親は子どもに黒人独自の文化と同時に白人主流社会の文化を伝えており、むしろ主流文化の内容の方が割合としては多いことを挙げている。こうした理論にも拘わらず、なお人形選択と自己概念について懸念する向きもある。例えばパウエル－ホプソンとホプソン（Powell-Hopson & Hopson, 1988）は、彼らの行ったドールズ・テストにおいて黒人の子どもたちに黒人寄りの選択をさせることに成功している。しかし彼らは事前に白人寄りの傾向が被験者の間で見られたのを確認後、直接的教授と強化によって黒人寄りの好みを教え込んだうえでそのような結果を得ている。これが黒人の中に肯定的な自己概念を恒久的に植えつけたかどうかは疑問に思われる。さらにその教授過程の中で黒人と白人の関係はお互いに尊重しあうものではなく、上下の立場を逆にしただけのものであり、前出のクロスによっても白人の子どもの間に自己嫌悪を植えつける結果になったとして批判を受けている。子どもたちの人種についての好みを変えられるかどうかは1975年にウィリアムズら（Williams, et al., 1975）がすでに言及しており、子どもの人種に対する態度は、直接的教授による行動の操作によっては変容するが、白と黒という色に関する子どもの感情的な反応を操作した場合にはその効果は減少し、特別なカリキュラムによってはほとんど変化を示さないとしている。これについては、子どもの中に形成された人種知覚が、より根の深いものであるということを表すものであると考え、パウエル・ホプソンらの主張に安易に耳を傾けるべきかどうかに警告を発するものとして受けとめたい。しかし子どもの人種観について教育の影響の可能性がうすいとすることに関しては、今一度考え直されるべきものであろう。

さて、これまでアメリカにおける黒人の子どもたちについての研究を挙げてきたが、他の人種や国の子どもについてはどうであろうか。。ジョンソン（Johnson, 1992）は白人と黒人の子どもに加えて黒人と白人の間に生まれた混血児を対象にして調査を行っている。彼女によれば、黒人と白人に比べて混血児は人種に対しての態度を形成するのが遅く、好みを述べるに際しても、人種的な理由づけをするのが少ない傾向にあるとしている。この研究でも五歳児の段階では混血児は白人寄りの態度を示すのであるが、両親の関係で生まれたときからどちらの人種にも接していることが独特の発達過程を示す理由であろうとされている。またゴポール・マックニコル（Gopaul-Mc. Nicol, 1988）は南米のトリニダードでドールズ・テストを使用して調査をした結果、トリニダード・トバゴの国民の大部分が指導者を含め黒人であるにも拘わらず、アメリカでの諸研究と同じように白人寄りの好みを示すことが明かになった。彼女はその理由としてメデイアなどから得られる情報が白人に偏った価値観を伝えていることを挙げている。

ではアジア人種の子どもたちの人種知覚はどうであろうか。アバウド（Aboud, 1988）によれば、アジア系アメリカ人を対象にした研究はその数が少ないが、その少ない研究の中では、アジア系の子どもたちは白人寄りの好みか同じ人種を好む傾向を示す結果が出ているとしている。モーランドとワン（Morland & Hwang, 1981）は香港、台湾、アメリカの三つの国の子どもたちを比較して、香港と台湾の子どもたちは人種の好みに対してアメリカの子どもほど際だ

った意味づけをしないという結果を引き出した。そして香港の子どもたちはアメリカと同じようにさまざまな人種に接する機会が多いが、人種による階層化がアメリカほど顕著でないため、そうした結果を生むのではないかということも指摘した。このようにアジア人種はその中間的な立場から、白人ないし黒人とは違って人種に関してはより曖昧な態度を取ることが考えられる。しかし、トリニダードでの例もあるように、全体的に白人寄りの傾向が強いこをも認めなければならないであろう。

以上の諸研究をもとにおいて日本での調査を行うことにしたが、これは今後継続して行われる研究の一部分として位置づけられることを付け加えておきたい。

方　　法

1．質問項目および仮説

今回の調査では、日本の幼児の人種知覚について基礎的な理解を得るために、クラークら（Clark & Clark, 1947）のドールズ・テストの一部に修正を加えて以下のとおりの質問項目を設定した。

1）もし遊ぶんだったらどっちのお人形さんがいい？
2）どっちのお人形さんがきれい？
3）どっちのお人形さんが悪い子かな？
4）アメリカ人のお人形さんはどっち？
5）＊＊ちゃん（くん）に似ているお人形さんはどっち？

1）はドールズ・テストにもあったように、人種の好みをきく質問である。2）では肌の色と美的感覚の関連性を見いだすために設けられたものである。3）では肌の色と人の性格や犯罪といった社会的事象が子どものなかで結び付いているかどうかを見るものである。4）は特定の国籍の名称に付随する人種的認識を明確にしようとするものである。5）の質問では肌の色、髪の色などに関わる自己認識をどのように行うかを調べるものである。

ドールズ・テストを日本の幼児を対象に行うにあたっては、言語や社会的背景の差を考えなければならない。例えば黒人や白人といった人種を指す言葉が日本の幼児の日常生活のなかで使われる可能性は少ないと考えられる。ところがアメリカでは多くの人種が共に生活しており、そのなかで黒人、白人という人種区分は日常的な会話において触れられることが多い。クラークら（Clark & Clark, 1947）が挙げた質問項目のなかで黒人と白人の区別ができているかを見るものがあるが、ここで使われている有色人種（colored）もしくは黒人（Negro）という用語はこの研究がなされた1940年代当時適切な用語であったが、後に差別用語とされて使われておらず、現在では Negro のかわりに Black という語を使い黒人のことを表現現している。つまり英語では黒人、白人という形容詞はともに色を指す形容詞の黒、白と同じであり、幼児にとっても覚えやすいものとなったのである。従ってアメリカでは幼児を対象とした質問において、どちらが黒人と白人とを模した人形か尋ねても、その意図に即した回答が得られるであろう。しかし異なった人種と接する機会があまりなく、その名称を耳にすることの少ない日本の子どもに対して同じ質問をした場合、どのような答えが返ってくるかは予測できない。そこでドールズ・テストにおける質問項目の5から7に関しては、子どもの人種に対する認知と言うよりは子どもの人種に関連した語彙を探る結果になると思われるので、今回の調査ではそれらの質問項目を除外した。

人種の名称を尋ねる質問項目は除外したが、その代替として国籍名称に関する質問を設ける

ことにした。用語としては「外人」という言葉を使うことも考えられたがて、被験者がどちらも外人であると答える可能性があるという予想から、より特定のイメージがあると思われる国籍名称を使用することにした。国の選定については名古屋市教育センターが1990年に出版した『名古屋の子供がとらえる国際化』という報告書を参考にした。そのなかの「身近に感じる国」という項目において、小・中学生が最も多く挙げたアメリカ合衆国を使用することにした。仮説ではアメリカ人のステレオタイプとして青い目、金髪という特徴があり、それが子どもたちの認識のなかにも入り込んでいるのではないかと考えられた。

肯定的なイメージをきく質問については、クラークら（Clark & Clark, 1947）の項目にもある「あなたが遊びたいと思う人形を私にください」というものを子どもに語りかけるような言葉に修正して使うようにした。「よい（nice）人形」に関してはより明確な価値的判断を伴うように、美的感覚を含めた「きれいな人形」という語に置き換えた。両方とも仮説ではアメリカにおける先行研究にあるように白人の人形を選択するであろうということが予測された。否定的なイメージをきくものについては、翻訳上の問題もあるが、「悪そうに見える」という言葉を「悪い子」というように置き換えたうえで、一つだけ尋ねることにした。この項目についても先行研究の結果から黒人の人形を選ぶことが考えられた。

最後の自己認識に関する質問項目であるが、どの人形とも特徴として日本の子どもを正確に表しているものとは言い難いので、どちらかと尋ねられた場合に被験者がどう答えるかは確実な予想ができなかった。しかしここでは一応白人の方を選ぶのではないかという仮説を立ててみた。もし白人の人形を選んだのならば、それは肌の色の具合から判断して自分に似ていると判断したか、それより前に置かれた質問の肯定的なイメージに対する回答に影響されたか、あるいは普段から見慣れているということによるものかのいずれかであると考えられた。普段から白人の人形を見慣れているというのは、日本の子ども向け人形の市場における状況による。例えばバービー人形のうち白人を型取ったものは金髪と青い目を持っているものの、それらは一般のデパートや玩具店で見られるだけでなく、他のメーカーの類似した人形も同じように金髪をその髪の毛として採用しているものが多く見受けられる。ところが黒人を模したような人形はなかなか見つからないばかりか、あったとしても少数民族のステレオタイプを助長するようなものであり、自己認識や自己投影の対象にはなりにくいと考えられる。被験者が黒人の人形を選んだとすれば、それは髪の毛の色と目の色を基準にして選択を試みたからであろうと思われる。

2．調査方法

調査はN幼稚園の幼児32名を対象に1993年6月に行われた。被験者の年令は3歳から5歳までで、男児18名、女児14名であった。被験者は一人ずつ保育中に応接室に実験者が個別に案内し、一対一で質問が行われた。室内は応接用のテーブルと椅子以外は質問内容に影響を与えるようなものは設置されなかった。実験者は被験者の緊張の度合いを和らげ、調査の流れを円滑にするため、事前に一般的な話題を被験者に提供して会話を交わした後、質問に入った。

人形はアメリカの玩具店でごく普通に入手できるものを4体購入して実験材料とした。4体の内訳は約60センチ大の男の子の人形2体（写真1）と、日本でも販売されているバービー人形2体（写真2）である。男の子の人形は年令的には幼児を模しており、被験者の年令に近いものである。バービー人形は十代後半から二十代とみられる女性を模しており、被験者との年令の開きはあるが、日本の市場でも一般に流通しているため被験者にとっては身近なものであると考えられる。二組とも黒人を模しているものは褐色の肌に茶色の目、黒い髪が、白人を模

したものはピンク色の肌に青い目、金髪が使われている。そして肌の色と目の色、髪の毛の色以外は形状、服装、表情は全て同じである。

人形の提示は被験者の半分に対しては男の子の人形→バービー人形の順で、残りの半分にはバービー人形→男の子の人形の順で交互に行われた。また黒人と白人の人形の左右の並べ方も一組目の提示の時と二組目の提示の時では入れ替わるようにした。人形は質問の際に被験者の前方のテーブルの上に立てる形で提示され、質問終了と同時に視界から外された。質問に対しては指ないし手で指し示すか、言葉によるかのどちらかによって答えられ、それを黒人、白人、どちらでもない（あるいはわからない）の三つに分類した。記録は質問の流れを円滑にするためにビデオを使用して全体を録画し、後で再生画面を元に分類を行った。

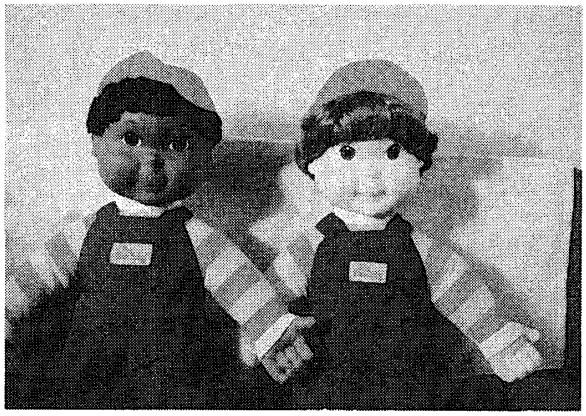


写真1

写真2

結　　果

質問1、2については仮説で予想したとおり、白人と答える件数が黒人と答えるものより多かった。被験者32名のうち、どちらが好きかをきく質問1で白人と答えたのは男の子の人形に対し23（72%、p＜.05）、バービー人形に対し22（69%、p＜.05）で、二項式分析法（Binomial Test）でどちらも有意差が見られた。合計では64回答中45（70%）であった。分からない、どちらでもないなどの中立的立場を示すものはそれぞれ3（9%）、7（22%）で、合計は10（16%）となった。黒人と答えたのは男の子の人形に対しては6（19%）、バービー人形に対しては3（9%）、合計では9（14%）であった。きれいな方をきく質問2でも白人と答えた率が高く、どちらも26（81%、p＜.0005）で合計は52であり、どちらも顕著な有意差が見られた。中立はそれぞれ2（6%）と3（9%）で、合計はわずか5（8%）であり、黒人と答えたのはそれぞれ4（13%）、3（9%）で合計では7（11%）となった。

質問3では悪い子を示すよう求めたが、これも仮説どおり黒人という答が多かったが、それは男の子の人形に対して21（66%、p＜.05）となり他の選択肢との有意差が見られたがバービー人形に対してはあまり顕著ではなく、20（63%、p＞.05）で有意差は見られなかった。合計は41（64%）になった。白人と答えたのは男の子の人形で6（19%）、バービー人形で3（9%）、合計で9（14%）であった。これに対して中立と答えたのは男の子の人形について5（16%）であるのに、バービー人形では9（28%）で、合計は14（22%）となった。

質問4でどちらがアメリカ人かを尋ねたが、結果は仮説に反して黒人と答えたものが最も多く、男の子の人形では22（69%、p＜.05）、バービー人形で21（66%、p＜.05）とそれぞれ他の選択肢に対して有意差が見られ、合計で43（67%）であった。白人という回答はそれぞれ

表1　男の子の人形

	好　き　な	きれいな	悪　　い	アメリカ	自分に似た
黒人	6(19%)	4(13%)	21(66%)	22(68%)	4(13%)
中立	3(9%)	2(6%)	5(16%)	5(16%)	11(34%)
白人	23(72%)	26(81%)	6(18%)	5(16%)	17(53%)

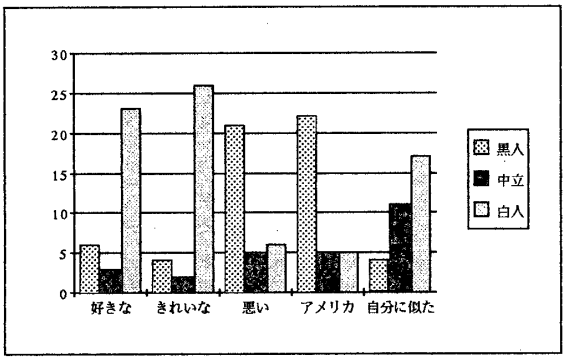
表2　バービー人形

	好　き　な	きれいな	悪　　い	アメリカ	自分に似た
黒人	3(9%)	3(9%)	20(63%)	21(66%)	6(19%)
中立	7(22%)	3(9%)	9(28%)	3(9%)	14(44%)
白人	22(69%)	26(81%)	3(9%)	8(25%)	12(38%)

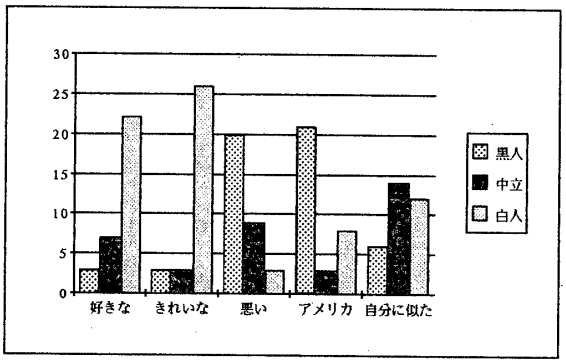
表3　全体の総数

	好　き　な	きれいな	悪　　い	アメリカ	自分に似た
黒人	9(14%)	7(11%)	41(64%)	43(67%)	10(16%)
中立	10(16%)	5(8%)	14(22%)	8(13%)	25(39%)
白人	45(70%)	52(81%)	9(14%)	13(20%)	29(45%)

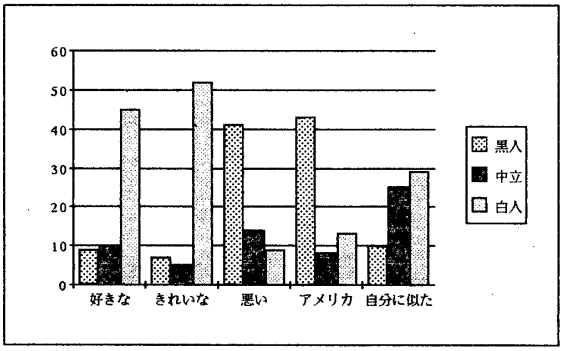
グラフ1　男の子の人形



グラフ2　バービー人形



グラフ3　全体の総数



5（16%）、8（25%）の合計13（20%）で、中立が5（16%）、3（9%）の合計8（13%）であった。

質問5でどちらに被験者自身が似ているかをきいた結果は白人という答と中立的なものに分散した。白人と答えたのは男の子の人形で17（53%、p＞.43）、バービー人形で12（38%、p＜.05）となり、合計でも29（45%）であり、他の二つの選択肢との有意差は見られなかった。中立的な答は男の子の人形で11（34%）、バービー人形では14（44%）、合計25（39%）となった。黒人と答えたのはそれぞれ4（13%）、6（19%）で合計10（16%）であった。

考　　察

このドールズテストにおいて、被験者は好きな、きれいなといった肯定的なイメージに対して白人寄りの回答をし、悪いという否定的なイメージに対して黒人寄りの回答をする傾向がみられた。アメリカ人はどちらかという質問に対しては仮説に反して黒人を挙げることのほうが多かった。また、自己認識としては白人寄り、乃至はどちらでもないという回答が一般的であった。

以上の結果から、日本の幼児は白人寄りの好みをもつ傾向があることが示された。このような傾向はアメリカにおける数多くの先行研究において黒人の子どもたちが示したものと類似している。またこれはゴポール・マックニコル（Gopaul-Mc. Nicol, 1988）が南米のトリニダードで行った研究で、人口の大部分が黒人であるにもかかわらず子どもたちが白人寄りの好みを示したこととも共通している。日本では人種の存在と区別はアメリカほど顕著でないはずであるが、依然として人種にまつわる先入観が流布していると考えられる。このように他の人種との接触があまりない日本の子どもたちが白人寄りの好みをもつのは、ゴポール・マックニコル（Gopaul-Mc. Nicol, 1988）も指摘しているように、メディアの影響に因るところが大きいと考えられる。テレビや新聞や雑誌に登場するモデルは、日本人以外では白人が起用されていることが多い。毎年数多く輸入される映画の中では、例えばアメリカ社会で黒人たちがどのような境遇で生活をしているかを見ることができる。ニュースの映像はしばしば飢えや内戦に苦しむアフリカの国を写しだす。日本のような他の民族に接する機会の少ない国にあっても、子どもたちはこうした環境に浸っているうちに知らず知らず人種にまつわる先入観を身に付けていくのであろう。これは子どもに至る以前に、大人の社会全体がそういった風潮を引き継いでいることに目が向けられなければならない。

そういった観点からすれば、日本の幼児がアメリカ人という言葉に対して黒人のイメージを持っていたというのは興味ある結果であると言える。これは日本の大人たちが思い描く金髪、青い目というものとは全く逆である。この質問については、数人ではあるがアメリカの研究者からも白人の方をとるのではないかという予測がされており、一般的通念として考えていたが、ここで今一度再考を迫られることとなった。理由として考えられるのは、まず日本の幼児にとってアメリカ人という言葉そのものが特定の国籍の人間を表すものとして捉えられなかったのではないかということである。これは一般名称として外人という言葉に置き換えていた場合となんら変わりはなかったかも知れない。とすれば、子どもたちは外国人としての区別をするに際して、肌の色の濃さを最も有力な手掛かりとしているということが考えられる。いまひとつは、子どもたちがアメリカ人という意味を認識したうえで黒人のイメージをより強く持っていたのではないかというものである。子どもの文化圏においては、アメリカという国が黒人に代表されるようなイメージを持つことも可能ではあろう。しかしこの仮説についてはメディアな

どの影響についてより詳しい検討が必要である。そのためには幼児だけに限定せず、全年令の傾向について探らなければならないであろう。例えば最近見られる十代の若者のアメリカの黒人文化に対する憧れなども考慮に入れることが考えられる。これはこれからの諸研究の課題となるべき問題であると思われる。

最後に自己認識についての質問の結果であるが、このように答えが分散するのはある程度予測していたことではある。しかも統計的に有意ではないが、大部分が白人と中立とに分かれていた。実際にはアジア人種として提示された人形のどちらにも似ていないはずであるので、中立の立場を取るのが妥当な答である。白人を取った理由として考えられるのは、肌の色という最も強い印象を与える要素に着目したか、あるいはバービー人形など日頃遊び慣れているものを取ったかということである。統計的にはほとんど差がないと思われるが、男の子の人形とバービー人形では、男の子の人形の場合の方が白人と答える数が多く、バービー人形ではその数が減っている。これは男の子の人形が同年令の子どもを模しており、より中性的でかつ子どもらしいのに対して、バービー人形の方は十代あるいはそれ以上の年令の女性を模しているために、男児と女児のどちらにとっても同一視の対象になりにくいことが考えられる。これは、今後の研究においてより多くのデータを取るか、あるいは違った種類の人形を使用することによって徐々に解明されるべきものと考えている。

お わ り に

日本の幼児の人種知覚については、今回の実験においてわずかではあるがその一端を見ることができた。こうした研究は、日本の教育を考えていくうえでこれからもさまざまな側面から進められていかなければならないであろう。今まで子どもたちが実際に人種の違いに関してどのような感覚を持っているかについては、教育の国際化が叫ばれる中であえて触れられてこなかった。その前提には、こういった問題は幼い子どもたちには関係がないか理解できないもの、あるいは理解できたとしてもできるだけ遠ざけておきたいものとして敬遠されてきたのではないだろうか。しかし人種による階層化が比較的顕著でない日本の社会においても、他の社会からの影響を受けて同じような価値観を作り上げている。しかも、最も実社会のさまざま力関係や構造に疎い存在と思われる幼児が、そういった概念を早くから持ちはじめるというのであれば、保育者はなおさら人種にまつわる先入観について敏感でいなければならないであろう。社会全体の状況を改革することは容易ではないが、少なくとも子どもの中に偏見が芽生えるのを助長するようなことだけはあってはならないはずである。ダーマン・スパークス（Derman-Sparks）らはその本「偏見をなくすカリキュラム」（Anti-Bias Curriculum, NAEYC, 1989）の中で、幼児はすでに人種に関する知覚を持ち得ると同時に、さまざまな偏見に対してそれを解消していこうとするだけの能力があることを主張している。彼女らの実践の記述の部分からは、保育者の働きかけ如何によってはそれも可能であることを見ることができる。

この実験をするにあたって考慮すべき問題点として挙げられたのは、人種知覚に関する質問をすることによって子どもに人種による偏見を再確認させてしまうのではないかという懸念であった。そこで実験者は質問終了後、被験者に対してさまざまな人種の子どもたちの写真を見せて皆が仲良くすることの重要性を説くことにしたのである。それがどれだけ子どもたちの中に国際化の芽を植えつけることになるかは明らかでないが、研究者のささやかながらの希望を託したつもりである。そしてさらに新しい方法による解明と共に、真の国際化を目指したカリキュラムの形成につながる研究を今後の課題としていきたい。

参 考 文 献

Aboud, F. (1988) .*Children and Prejudice,* Oxford: Basel Blackwell.

Clark K. and Clark, M. (1947) . Racial Identification and Preference in Negro Children. In T. Newcomb and E. Hartly (Eds.) ,*Readings in Social Psychology.* New York: Holt, Reinhart, and Winston.

Cross, (1991) *Shades of Black: Diversity in African American Identity.* Philadelphia: Temple University Press.

Derman-Sparks, L. and the A. B. C. Task Force. (1989) . *Anti Bias Curriculum: Tools for Empowering Young Children.* Washington, D. C.: NAEYC.

Fine, M. and Bowers, C. (1984) . Racial Self-Identification: The Effects of Social History and Gender. *Journal of Applied Social Psychology, 14* (2) ,136-146.

Gopaul-Mc. Nicol, S. (1988) . Racial Identification and Racial Preference of Black Preschool Children in New York and Trinidad. *Journal of Black Psychology, 14* (2) ,65-68.

Johnson, D. (1992) . Racial Preference and Biculturality in Biracial Prechoolers. *Merrill Palmer Quarterly, 38* (3) ,233-244.

Morland, J. and Hwang, C (1981) . Racial/Ethnic Identity of Preschool Children: Comparing Taiwan, Hong Kong, and the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 12* (4) ,409-424.

Powell-Hopson, D. and Hopson, D. (1988) . Implications of Doll Color Preferences among Black Preschoool Children and White Preschool Children. *Journal of Black Psychology, 14* (2) ,57-63.

Spencer, M. (1984) .Black Children's Race Awareness, Racial Attitudes and Self-Concept: A Reinterpretation. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 23* (3) ,433-441.

Williams, J. Best, D., Boswell, D., Mattson, L. and Graves, D. (1975) . Preschool Racial Attitude Measure II. *Educational and Psychological Measurement, 35,* 3-18.

東京学芸大学海外子女教育センター『国際化時代の教育ー帰国子女教育の過程と課題展望ー』1986　創友社

名古屋市教育センター『名古屋の子供がとらえる国際化』1990　名古屋市教育センター

宮智宗七『帰国子女ー逆カルチュア・ショックの波紋』1990　中公新書

ライシャワー『真の国際化とは』1988　チャールズ・イー・タトル出版